

---

# 水音ラルの超絶番外編

水音ラル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水音ラルの超絶番外編

### 【Nコード】

N2115Z

### 【作者名】

水音ラル

### 【あらすじ】

「仮面ライダーディージェント」破壊の代行者」の作者、水音ラルが送る非常にどうでもいいネタ話で構成された短編集！！

キャラクターは後書き仕様ですので、キャラ崩壊は当たり前！ギャグ成分が欲しい方は、是非ご拝読ください！！

If story 須藤兄妹が本当に兄妹だったら (前書き)

このお話は、サブタイトルの通りもし須藤歩が仮面ライダーではなく普通の大学生で、亜由美がその妹として一緒に暮らしていたらと言う、私の妄想全開の番外編ですーw。)

なお、仮面ライダーの登場人物は出てきますが、全員極々普通(?)の人達です。戦闘などは一切ありませんのでご了承をm―――m  
それでは本編の事は頭からはずしてお楽しみください (・w・)

## If story 須藤兄妹が本当に兄妹だったら

私、須藤<sup>すどう</sup>亜由美<sup>あゆみ</sup>は石ノ森町の高校に入ってから、大学に通う兄である須藤<sup>すどう</sup>歩<sup>あゆむ</sup>の暮らすマンションで一緒に暮らしている。

兄が大学に通う為の居住先を決める際、両親が近いうちに私も兄と同じ大学に通うのだからと言って少し大きめの部屋を借りたのだ。それからかれこれ三年間、兄と一緒にいるのだが、今一つの問題にぶち当たっていた。

事の発端は私が兄に用があつて兄の部屋に訪れた事が原因だ。

「兄さん、入るよ」

軽くドアをノックして中へ入ったのだが、私は目の前に広がる光景を目にして思わずこう呟いてしまった。

「……何このカオス？」

もはやゴミ屋敷だった。

兄の部屋にはしばらく入った事がなかったから彼のお部屋事情は知らなかったのだが、いくらなんでもそれはそれは酷い有様だった。

まず山のように積まれた本で出来た塔が何本も建設されている。

どうやら小説・マンガ・教材などで分けられている様だが、今にも崩れそうだ。

次に床に散らばったゴミ袋。

その半透明の袋から見えるのは菓子パンの包装紙の様で、それが部屋の隅っこに山を築いていたみたいだが、その中から崩れていくつ

かが部屋の中央に転がっている。

そして最後に、この部屋の奥に存在しているであろうデスクチェアに座っているこのカオスを生み出した存在が何かの本を熟読している。

そう…この人こそが私の兄……

「ん？どうしたの亜由美」

須藤歩その人である。

少し長めの真ん中分けの黒髪に、それなりに端正な顔立ちなのだが、虚ろな目（私的には死んだ魚の目だと思ってる）のせいで少々残念な感じになった隠れイケメンである。

「兄さん…どうやってたらこんな惨劇が起きるの？」

「惨劇？」

私は部屋を見渡しながら言うが、兄は何の事だかサッパリの様だ。私は深く溜め息を吐くと、キツと兄を睨みつけてズンズンと近づいて行った……

「あ、もう少し慎重に歩かないと……」

ドザドザドザ……！！

「ニ ヤアアアア！？」

「そうなるよ」

本の塔が私に向かって崩れて来たせいで完全に埋もれてしまった。言うのが遅い！！そしてやっぱりテンションが低い！！

兄の口調は抑揚がなく、常に低いテンションで話すのだが本人曰く「それでも高い方」らしい。

現に兄の知り合いに今の兄の心境がどんな感じかと伺えば、十人中十人が「テンションが高い」と答えるだろう。

私はゆつくりと本の中からドス黒いオーラを放ちながらゆつくりと立ち上がった。

「兄さん……」

「ん？何？」

兄は私のオーラに一切気付いてる気配がない。それが余計に私の怒りに拍車を掛ける。

「とりあえずこの部屋から出て」

「え？何で？」

「片付ける為に決まってるでしょうがあああああ！！」

私は無理矢理兄を部屋から放り出し、部屋の片づけを始めた。

「で、何で私の家に来てんのよ？今の話と関係があるの？」

「お願い、察して加奈かな：刑事の娘としての推理をここで働かせて……」

……」

それから一週間後……現在、私は幼馴染の住んでいるマンションを訪ねていた。

彼女の部屋は実に女の子らしく、藤原加奈と言う少女の印象にもピッタリだった。ウン、やっぱりこう言う部屋が良いよね。

「……軽く推理してみたけど、アンタが歩と暮らすのが嫌でここに家出して来たってイメージしかわからないんだけど……」

「そう、それ！その通り！！だってあの後、丸半日かけて兄さんの部屋掃除したんだよ！？それなのに今日また兄さんの部屋を見てみたら先週と同じ光景が広がってたんだよ！？私の労力を返してほしい！！」

「そりゃ一週間もすれば散らかるのは当然でしょ……しかも相手は男なのよ？掃除好きの男の人なんて翔一さんあいつくらいのものよ？」

「そりゃそうだけど……！翔一さんほどは行かなくてももうちょっと気を配ってほしい……！！」

翔一さんと言うのはこの町にある「レストラン・アギト」と言う変わった名前の店で料理長をやっている青年の事だ。

何でも兄の先輩に当たる人らしく、人付き合いがとても良い好青年だ。

まあ、時々寒いダジャレをかまして来るのだけは勘弁だけど……。

「で、本気でここに泊まる気？」

「イエス！」

「だが断る」

「ヒドイ!？」

それはあんまり過ぎる！もうちょっと悩んでくれてもいいじゃん！！

「だって、どうせ『兄さんが心配だから帰る』とか言っただけで戻らんんじゃないの？」

「そ、そんなことないもん!!」

「どうだかね…歩がこの町に越して来た頃は授業中でもすごく心配してたじゃん」

「うぐ……」

だって、あの人ほつとくと何仕出かすか分かったモンじゃないよ!? 部屋の事もそうだし、変な友達多いし、ご飯なんて基本菓子パンとチャーハンなんだよ!? 不摂生にもほどがある!!

「だったらこんな所で油売ってないで早く帰りなさい。今日帰つてるときに歩見掛けたんだけど、野上兄弟のがみの末っ子に絡まれてたわよ?」

「ゲッ!?!」

マズイツ! 末っ子って一番危ない方じゃん!! リユウ君何かに付き合ってたらボロ雑巾になるよ!?

あの子、元気なのは良いんだけど元気過ぎて周りに迷惑かけちゃうんだよねえ…。しかもそれがウチの兄と一緒にいたとなると何が起きるか……連れ戻さないと!

「どこで見かけた!?!」

「商店街の方よ」

「分かった! 行つて来る!!」

「逝つてらっしゃい」

「字が違う!?!」

加奈の最後の言葉が気になるものの、私は急いで彼女の部屋を後にした。



商店街にやって来たのは良いものの、ここは何気に広い……さて、どこから探すか……

「ん？お前は確か、須藤の妹の方か？」

「へ？あ、天道さん<sup>てんどう</sup>」

落ち着き払った声が私を呼んで来たのでそちらを振り向くと、そこには作務衣を着た二枚目顔の青年が立っていた。

彼の名は天道総司……兄の友人の一人だ。

文武両道、才色兼備で何をするにしても完璧超人って感じの人なんだけど、一つ問題が……

「えーと、天道さん……こちら辺で兄さんを見かけませんでしたか？」

「……おばあちゃんは言っていた」

ほら始まった……。

「人を頼る前に、まず自分を頼る事が大事だと……」

「つまり自分で探せって事ですネ？」

この人、偶にこういうおばあちゃんの教えを言って遠回しに答えて来るんだよねえ。普通に知らないって言えばいいのに……。後、右手で天を指差してるけど何か意味あるの？

「フツ、そう言う事だ。流石はアイツの妹だな……俺のおばあちゃんの教えをすぐ理解するとは……」

「あゝハイハイ、それじゃあ探してきまゝす」

私はとりあえず適当に流して天道さんと別れた。  
それにしても、何で兄の知り合いには変人しかいないのだろうか…  
…。

兄は一人でいる時は我が道を行くけど、誰かと居る時は振り回されっぱなしになるという習性があるから、まずは一緒にいると思われるリュウ君の考え方に順じてゲームセンターにやって来た。ほら、最近の子ってよくこう言う所で遊ぶからさ。

「うゝん…一通り見たけどいそうにないなあゝ」

『はいなああああ！！』

『うおおおお！！』

ん？何だか向こうの方で盛り上がってるみたい。何があるのかとそちらを見るとそこは人だかりで溢れていて、その中央にいる人に注目している様だ。

確かあそこに設置されてたゲーム機はダンスゲームだったはずだ。  
気になって来たので、ちょっと覗いてみよう。

「ああゝダメや！あんのクソガキのハイスコアを追い越せへん！！」

そう頭を抱えながら喚いてたのはパンクな格好をした青年だった。しかも、この人も兄の友人の一人だ……。今日は一体何なのだろうか…厄日？厄日なの…？帰らないと言ったバツなの？

「お、嬢ちゃんやないか！おひさ〜」

「章治さん…美玖さんほつといて大丈夫なの？」

青年…章治さんはこちらに気付き軽く挨拶をしてきた。この人って確かスマートブレイン社の結構偉い人だね？仕事大丈夫なの？因みに美玖さんと言うのはこの人の彼女で社長の正幸まさゆきさんの秘書をやっている。見た目は怖いけど、実は結構優しい人なんだよね。

「ダ〜イジヨウブやって嬢ちゃん！ウチの仕事は基本部下に丸投げしとるし、美玖やって今日は正幸と一緒に会議に……」

「こんな所で何を遊んでるんだ貴様はああああ！！」

「つてええええ美玖！？何でおんねん！？」

美玖さんが章治さんを怒鳴り散らしながらゲームセンターに入ってきた。そのレディススーツのシャツのボタンを全部止めているが、その大きな胸のせいでシャツがパツパツになってしまってる。

しかもそのボタンの隙間から胸の谷間がほんの少しだけ見えるから

…正直エロい。

「正幸に頼んで貴様を探しに来たんだ！まったく、私が目を離すとすぐこれだ……！！」

「やったらウチに首輪なり何なり付けて従順させてみたらどうや？嬢王様？」

その言葉を聞いた途端美玖さんの顔がボンツと爆発したみたいに赤くなった。

「な、なな何を言い出すんだききき貴様は…!?!」  
「からかっただけやんか、美玖ってホンマかわええなあ」  
「き、きつさまああああ!!」

そのまま二人はゲームセンターから飛び出し、追いかけてここを始めた。ウン、ホントに美玖さんって可愛いよね。  
じゃあ兄の搜索を続けますか。

ゲームセンターを後にした私は、そのまま当てもなく商店街の周りを歩き回っていた。  
そういえばさつき章治さん、「あのクソガキのハイスコアが」とか何とか言ってたっけ……。  
って言う事はさつきまでリュウ君も来てたのかな? あの子ってダンス上手いからなあ。

『オイコラテメエ! ホントにおまわりなのかよ!? ウチのリュウタ見てねえってどういう見だ! ああん!?』

『俺に質問をするな』

『それが警察の態度かテメエエエ!!』

『落ち着きなつて兄さん、いくら探さないと良太郎が怖いからって、警察の人にケンカ売っちゃダメでしょ』

『せやでモモの字。ここで喧嘩したって埒が……zzzz』

『そこらかしこで寝るんじゃないクマアアア!!』

『もう俺はこれで失礼させてもらう。まだ事件の調査中なんぞな』

『あ、テメ! オイ待ちやがれええええ!!』

……ウン、何だかすつごく聞き覚えのある声がした。しかもリュウ君のお兄さん達じゃん。

そちらを向いてみるとやはりいた。まったく同じ顔だけど性格が全然違う野上兄弟の内の三人だ。

赤いジャケットを来た警察の人にケンカ腰でリュウ君を訊ねていたオールバックに赤いメッシュを掛けた不良っぽい人が長男の百太ももたさん、通称モモさん。

それを冷静に仲裁している青いメッシュにメガネを掛けた色男オーラを放っているのが次男の浦太うらたさん、通称ウラさん。

そしてその二人よりも大柄で長い後ろ髪を縛って黄色いメッシュを掛けた立ったまま寝ている人が三男の金太熊きんだゆうさん、通称キンさんだ。これであと四男の良太郎君と末っ子のリュウ君で野上兄弟全員集合状態なんだけど、やっぱり彼らもリュウ君を探しているらしい。

「おや？やあ亜由美ちゃんじゃないか。こんなところで何してたのかな？ひよっとして大学の帰り？」

そんな事を考えていると、ウラさんが私に気付いて話しかけて来た。

「ハイ、そうなんですけど、兄を探してて……何でもリュウ君と一緒にいるとかで……」

「へえーそうなんだ、奇遇だね。実は僕達もリュウタを探してたんだよ。よかったら僕と二人で探しに行かない？」

そうだなあーやっぱりここは遊園地にでも言つて観覧車から街を見下ろしながら探した方が得策じゃないかなあー？」

……何かこの人急にナンパして来たよ？このイケメンフェイスで口説かれたら普通だったら落ちるんだろうけど、私的にはまだ兄さんの方が……って何言ってるんだ私！？ち、違うよ！違いますよ！？私は決してブラコンなんかじゃありませんよ！？

「ん？どうしたの、顔赤いけど……熱でもあるんじゃないかな？」

そう言いながら額に手を当てて来た。

……ウン、何か落ちて着いてきた。ありがとうウラさん。

「いや、大丈夫です。ところであそこの二人はどうするんですか？」

「あの二人だったら別にほっというても大丈夫……」

「ウラちゃんドーン！！」

「ブゴッ!？」

二人の兄を置いて行こうとしていたウラさんの背中にこの人達と同じ顔（但し若干幼い）の男の子が体当たりして馬乗りになってきた。何かゴキッて音が聞こえて来たんだけど大丈夫だね？まあ天罰なんだろうけど……。

そしてそのウラさんに天誅を下した男の子は、ウエーブ掛かった髪に紫のメッシュを入れた野上兄弟の末っ子の龍太郎君、通称リュウ君だ。

「ウラちゃんまたナンパしようとしてるー。僕にもナンパ教えてよー」

「リュ、リュウタ……とりあえず、どいて……」

「やーだー。ナンパ教えてくれないとどかなーい」

これだからこの子は厄介なのだ。相当好かれた人の言う事くらいし

か聞かないし、しかも野上兄弟の中で唯一聞くのは良太郎君だけだ。一体どういう教育させてんの？

あ、そうだ…この子って確かうちの兄と一緒にいたはずだよね？  
じゃあ兄は一体どこに行ってしまったのだろう……。

「ねえリュウ君、兄さん探してるんだけど知らない？」

「あ、亜由美お姉ちゃん。歩いたら『晩ごはんの支度するから帰る』って言って帰ったよ」

……どうやら私は無駄な労力を消費してしまっていただけらしい。  
帰る……。

「そつか、じゃあ私も帰るね。ところで、何で兄さんと一緒にいたの？」

「亜由美お姉ちゃんが帰ってきてなかったから探してたんだって」

そうだったんだ…ああ見えて兄さんって意外と私の事心配してくれてたんだね……。

「あ、それと買い物についてって言ったよ。家に何もなかったみたいだから」

前言撤回。私ってついでか！？買い物についてなのか！？

これは兄さんに一度乙女が何たるかを教えなければならぬみたいね……。

「じゃあまたねリュウ君！」

「またね〜！」

「ね、ねえリュウタ…いい加減に、どいて……」

「しばらくそうしとけ」

「自業自得やな」

「二人まで!？」

後ろから楽しそうな（ウラさんは微妙）声が徐々に遠くなっていく中、私は兄さんの待っている家への帰路を走った。

「あ、おかえり」

家に帰ると兄さんは夕飯の支度をしていた。そしてその手に握られたフライパンに入っているのが何かなんて見なくとも分かる。

兄さんの唯一作れる料理・チャーハンだ。しかも何気に美味しいから文句も言えない。

これが兄さんが菓子パンとチャーハンしか食べない理由だ。偶に外食に行く事があつたとしても、基本的にジャンクフードくらいしか食べない。ホントに粗食だよね。

「兄さん、今日の料理当番って私の筈じゃ……」

「何時帰って来るか分からなかったからね。それに、今回はチャーハンだけじゃないよ」

「へ？」

『おい歩うう！持って来てやったぞおー!!』

兄さんの言葉に間抜けな声を漏らすと、突然玄関の扉越しから声が聞こえてきた。

「来たみたいだね…亜由美、代わりに出てあげて」



「あ、ウン」

私は丁度玄関の前に立っていたので素直にドアを開けるとそこにはいくつかのタッパ―を持った茶髪の青年が気のいい笑顔で立っていた。

「お、亜由美ちゃん！歩の方はもう出来たのか？」

「真司さん？何ですかそのタッパ―は？」

彼は私達のすぐ隣の部屋に住んでいる新人記者の城戸真司さん。

ちよつと抜けてる所とかがあるけどかなり良い人だ。

あと、何気にこの人が兄さんの友人の中で一番常識人だったりする。私としても一人は欲しいツツコミ役の人だ。

「ああこれ？俺の作った特製ギョーザ！歩が俺の分のチャーハン作ってくれる代わりに、交換してくれってさ！」

そう言いながら一つのタッパ―のフタを開くと、そこにはギョーザが二十個近く入っており、芳ばしい香りがして食欲をそそる。

彼も兄さんと同じタイプで一つの料理しか作れないけど、それがすごく美味しいのだ。

このギョーザが兄さんの一番の好物だったりする。

「そう言う事。こつちも出来たから一緒に夕食にしようか」

「おーじゃあゴチになりまーす！！」

そう言いながら真司さんが部屋に上がって来て食器などの準備を始めた。

うーん、何だろう…何か忘れてるような……。

ま、いっか！兄さんも楽しそうだしね！！

## If story 須藤兄妹が本当に兄妹だったら (後書き)

如何でしたでしょうか？

実はこのお話、私がディージェントを投稿して間もない頃に書いて、今まで温めて来たエピソードなんです。

なので登場人物もファイズ編までの人＋オリジナルの方々しかいませんし、あまり得意ではない一人称で書いておりますので何時もと随分と違う雰囲気の作風になりました。

そして遂にやらかしちゃった亜由美ちゃんブラコン疑惑ww

そんな亜由美ちゃんに萌えた人、感想にて挙手をお願いしますーw・

／＼

その結果によつては本編の歩への好感度が変わるかもです。(あくまで“かも”なので期待はしないように)

こちらの番外編は本編と違って不定期更新になりますが、今後もしんで頂ければと思います。

バレンタインデーネタ、考えた方が良かな……。

それではまた！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2115z/>

---

水音ラルの超絶番外編

2012年1月8日18時52分発行